

フィンランド語の〈on+主名詞+A 不定詞基本形〉の構造を持つ

所有文・必須文

久保田 樹 (名古屋大学大学院)

要旨

本稿は、〈コピュラ動詞 on+主名詞+A 不定詞基本形〉の構造をもつ所有文・必須文を取り上げ、構造内部の結合度に関する段階性を、主名詞と A 不定詞句内目的語の格選択に注目して記述・整理する。従来、問題の構造における結合度の強弱は、主名詞が文の目的語である SVO 文の A 不定詞句内目的語の格選択と関連づけて記述されてきた。所有文・必須文に目を向け、さらに主名詞の格選択も考慮に入れることで、結合度強弱の段階性を精緻化することができる。

1. はじめに

フィンランド語の A 不定詞基本形には様々な用法がある¹が、そのうちの一つに、名詞修飾がある。本稿では、名詞修飾に端を発する〈コピュラ動詞 on+主名詞+A 不定詞基本形〉を含む所有文の〈on+主名詞〉が結合し、もはや名詞修飾とは見なせない必須文に至るまでの段階性を、格の観点から論じる。本章では背景知識として、まず 1.1 節で、A 不定詞基本形による名詞修飾を概観する。1.2 節では、目的語の格体系全体についてまとめる。そして 1.3 節で、比較のために、主名詞が文の目的語に相当する場合の、A 不定詞句内の目的語の格選択について見ていく。

1.1 A 不定詞基本形による名詞修飾

A 不定詞基本形による名詞修飾において、主名詞は動詞由来名詞 (pyrkimys 「努力」, tarve 「必要」, vaatimus 「欲求」, yritys 「努力」等) か、抽象名詞 (keino 「手段」, tapa 「方法」, mahdollisuus 「可能性」, tilaisuus 「機会」, vapaus 「自由」, oikeus 「権利」, syy 「理由」等) である。そして A 不定詞句は、それらの主名詞の意味内容を補う。主名詞句は、文の主語 ((1a)), 目的語, 補語, 場所格副詞のこともあるが、(1b)のように所有文で用いられることが圧倒的に多い。

- (1) a. Aikomukse-ni [matkusta-a maa-lla] rauke-si.²
intention.NOM-POSS.1SG travel-AINF countryside-ALL weaken-PAST.3SG
「田舎に旅行したいという私の意志は弱まった。」 (Penttilä 1963: 490³)
- b. Minu-lla ei ole vara-a [ostaa si-tä].
I-ADE NEG.3SG be allowance-PAR buy-AINF that-PAR
「私にはそれを買う余裕はない。」

¹ A 不定詞基本形の全用法については、*JSK*(2004: 491, 493-507)にまとめられている。

² 本稿では、A 不定詞句は [] に入れて表す。

³ グロス、和訳、括弧は本稿執筆後、以下同様。

1.2 目的語の格体系

フィンランド語における目的語の格体系は、やや複雑である。目的語には、分格か対格が用いられるが、無標とされるのは分格のほうである。以下の三つの条件、①肯定文である、②行為（現象）が完結（完了）しているかまたは完結（完了）することが予定されている、③行為（現象）が、目的語の表す対象の全体におよぶものである、の全てが満たされれば対格に、一つでも満たされない場合は分格になる（松村 1992: 679）。人称代名詞と疑問代名詞を除いては、対格特有の形が存在しない。単数対格（n 対格）は単数属格と、複数対格（t 対格）は複数主格とそれぞれ同形である。不定人称受動文、命令文、必須文といった、主格の主語が存在しない特殊な構文では、n 対格は ϕ 対格になる。 ϕ 対格は、単数主格と同形である。

A 不定詞句の包括目的語の格に n 対格と ϕ 対格のどちらが用いられるかは、A 不定詞基本形の用法によって異なる。名詞修飾用法を除くと、目的語として用いられる用法 ((2a))、目的語として以外の動詞連続で用いられる用法 ((2b))、動詞連合において用いられる用法 ((2c)) の三つの用法においてのみ n 対格が用いられ、その他の用法では ϕ 対格が用いられる⁴。その三つの用法ではいずれも、〈主動詞+A 不定詞基本形〉((2)の下線部分)が、全体として述語を形成している。

- (2) a. Poika halua-a luke-a kirja-n. 「少年は本が読みたい。」
 boy.NOM want-3SG read-AINF book-nACC
 b. Poika voi luke-a kirja-n. 「少年は本を読むことができる。」
 boy.NOM can.3SG read-AINF book-nACC
 c. Poika on luke-a kirja-n. 「少年は本を読みそうだ。」
 boy.NOM be.3SG read-AINF book-nACC

そしてこれらの場合、主動詞の影響を受けて、目的語の格が変わる。例えば、否定文であれば分格に、不定人称受動文であれば ϕ 対格になる。それに対して、肯定文で ϕ 対格目的語をとる A 不定詞句は主文の影響を受けず、否定文でも分格にならずに ϕ 対格のままである。以下の表にまとめる。

表1 A 不定詞句における包括目的語の格

	主文から影響	A 不定詞句が独立
肯定文	n 対格	ϕ 対格
否定文	分格	
特殊文	ϕ 対格	

それでは名詞修飾用法の場合はどうかというと、 ϕ 対格と n 対格の両方が見られる。基本的には ϕ 対格だが、〈主文の動詞+主名詞〉の結合が進むと、n 対格が用いられるようになる。

⁴ A 不定詞基本形を含む全不定詞の不定詞句内の目的語の格については、Toivonen(1995), *ISK*(: 890-891)等にまとめられている。そこでは、主文の項として働く不定詞句では、その目的語が主文の影響を受ける（否定文では分格に、不定人称受動文では ϕ 対格になる）が、主文の修飾語として働く不定詞句では、その目的語が主文の影響を受けない、とされている。

以下でそのメカニズムを見ていこう。

1.3 SVO 文における A 不定詞基本形の目的語の格

本小節では、SVO 文の〈主語+動詞+主名詞+A 不定詞句〉という形式における、A 不定詞基本形の目的語の格選択を扱う。この問題については先行研究が複数あり、Penttilä(1963: 597)等では、主名詞が文全体の述語と緊密に結びついている場合には n 対格、両者の関係が緩ければ ϕ 対格だとされている。まず、下の(3)は、 ϕ 対格の例である。

- (3) Poika laat-i suunnitelma-n [luke-a kirja].
 boy.NOM work.out-PAST.3SG plan-nACC read-AINF book. ϕ ACC
 「少年は、本を読む計画を立てた。」

(3)では、主文の動詞 *laatia* 「(計画を) 立てる」の格支配により、その目的語である主名詞 *suunnitelma* 「計画」は n 対格になっているが、A 不定詞句内の目的語 *kirja* 「本」は ϕ 対格である。否定文では、主文の目的語 *suunnitelma* 「計画」は分格になるが、A 不定詞句内の目的語 *kirja* 「本」は否定の影響を受けず、分格ではなく ϕ 対格のままである。まとめると、(3)の文では、主文の目的語に相当する主名詞は、構文の影響を受けて格が変わるのに対し、A 不定詞句内の目的語は主文の影響を受けず、常に ϕ 対格である。これは、A 不定詞句が主文の述語から独立して主名詞を修飾しているからである。表 1 でいうと、右側に相当する。

(4)は、A 不定詞基本形の目的語が n 対格の例である。主文の動詞と主名詞が、(3)と異なっている。

- (4) Poika sa-i luva-n [luke-a] kirja-n].
 boy.NOM get-PAST.3SG permission-nACC read-AINF book-nACC
 「少年は、本を読む許可を得た。」

(4)では、主文の動詞 *saada* 「得る」の格支配により、その目的語である主名詞 *lupa* 「許可」は n 対格になっている。そして、A 不定詞句内の目的語 *kirja* 「本」は、述語全体 ((4)下線部) の格支配により、n 対格になっている⁵。否定文では、主文の目的語 *lupa* 「許可」も A 不定詞基本形の目的語 *kirja* 「本」もどちらも分格になる。必須文などの特殊文では、主文の目的語 *lupa* 「許可」も A 不定詞句内の目的語 *kirja* 「本」もどちらも ϕ 対格になる。(4)の〈*saada* 「得る」+*lupa* 「許可」〉は、(2b)のように一語の助動詞 *saada* や *voida* 「～できる」に換言でき (ISK 2004: 897)、下線部全体で文の述語になっているため、否定文や特殊文の格の影響が A 不定詞句基本形の目的語にまで及んでいる。A 不定詞句が主名詞を修飾しているももとの構造 ((5a) から、助動詞の働きをする〈主文の動詞+主名詞〉のまとまりが A 不定詞句を従えている構造 ((5b) になった。

⁵ A 不定詞基本形が分格目的語を要求する動詞であれば、A 不定詞基本形の目的語である名詞は、n 対格ではなく分格になる。

(7) Minu-lla ei ole huono olo. 「私は気分が悪くはない。」

I-ADE NEG.3SG be bad.NOM feeling.NOM

必須文は、「～しなければいけない」という意味を表すモダリティ表現である。行為者が属格で表され、täytyä や pitää といった第一動詞が 3 人称単数で、そして第二動詞が A 不定詞基本形で続く。目的語は、もともと n 対格であれば、 ϕ 対格に変わる。否定文になると、目的語は分格になる。

(8) Poja-n pitää luke-a kirja. 「少年は本を読まなければならない。」

boy-GEN must-3SG read-AINF book. ϕ ACC

2.2 格選択と結合度の段階性

それでは、A 不定詞基本形を含む所有文では、所有物である主名詞や A 不定詞基本形の目的語の格選択はどうなるだろうか。1.3 節で見たように、主名詞が文の目的語の場合には、主名詞が主文の動詞と助動詞的なまとまりを形成している場合に、A 不定詞基本形の目的語の格は ϕ 対格ではなく n 対格になった。先行研究では、むしろ所有文の場合に、結合した表現が多く見られると言われている。例えばフィンランド語最大の記述文法書 *ISK*(2004: 502)は A 不定詞基本形の用法の箇所では、確立された表現では、A 不定詞句はもはや主名詞句に属するのではなく動詞 on と述語を形成していると解釈できると述べている。そして例として、〈on+oikeus 「権利」〉や〈on+toivo 「望み」〉を挙げている⁶。だが、目的語の格選択に関しては、「主名詞が文全体の主語、存在文・所有文における存在物・所有物、状況文の補語の場合、A 不定詞句内の包括目的語は ϕ 対格である」(*ISK* 2004: 895) としか記述されておらず、A 不定詞句が主文から独立しているかそれとも on と結びついて述語の一部となっているかという構造的違いと、それに密接に関係するはずの A 不定詞句内目的語の格選択とが結びつけられていない。確かに表面上は、主名詞が主文の主語や補語もしくは主文の動詞と結合していない目的語の場合も、所有文における場合も、同じ ϕ 対格になってしまうが、その格選択の理由は異なるのである。前者において A 不定詞句内の目的語が ϕ 対格なのは、A 不定詞句が主名詞を修飾しており、主文から独立しているからである(表 1 の右側)。それに対して、所有文で目的語が ϕ 対格なのは、そもそも所有文では主格の主語が主文に存在しないからだという、A 不定詞句の独立性とは別の理由によるものである。問題の所有文が A 不定詞句を述語の一部とする構造であることは、否定文に目を向けることで確認ができる。A 不定詞句が主文から独立している否定文において目的語はやはり ϕ 対格のままなのに対して、所有文では分格になり、A 不定詞句が

⁶ Vilkkuna(2003: 290)では、所有文での〈on+aikaa 「時間」〉は ehtii 「～する時間がある」に、〈on+oikeus 「権利」〉は saa 「～できる」に言い換え可能だとしている。ただし、ehtii や saada は主格主語を持つ普通の文で用いられるので、SVO 文の場合とは違って、所有文の〈on+主名詞〉にそのまま置き換え可能な訳ではない。

(i) a. Minu-lla on aika-a [luke-a kirja]. 「私は本を読む時間がある。」

I-ADE be.3 SG time-PAR read-AINF book. ϕ ACC

b. * Minu-lla ehti-i [luke-a kirja]. 「int. 私は本を読む時間がある。」

I-ADE have.time-3SG read-AINF book. ϕ ACC

c. Minä ehdi-n [luke-a kirja-n]. 「私は本を読む時間がある。」

I.NOM have.time-1SG read-AINF book-nACC

主文から独立しておらず、句内目的語が主文の影響を受けていることが分かる。

(9) a. 肯定文

Minu-lla on aikomus [osta-a auto]. 「私は車を買うつもりだ。」
I-ADE be.3SG intention.NOM buy-AINF car. ϕ ACC

b. 否定文

Minu-lla ei ole aikomus-ta [osta-a auto-a]. 「私は車を買うつもりはない。」
I-ADE NEG.3SG be intention-PAR buy-AINF car-PAR

続いて、さらに結合が進みモダリティ表現となった、必須文的なタイプについても見ていこう。必須文の *täytyä* や *pitää* といった第一動詞の代わりに〈on+主名詞〉が用いられた、(10)のような表現がある。用いられる名詞としては *ISK*(2004: 1503)に、*pakko* 「強制」、*tarpeen* (*tarve* 「必要」の属格)、*lupa* 「許可」、*määrä* 「量」、*syytä* (*syy* 「理由」の分格)、*aihetta* (*aihe* 「理由」の分格)、*aika* 「時間」が挙げられている。

(10) a. 肯定文

Poja-n [on pakko] [luke-a kirja]. (cf. (8))
boy-GEN be.3SG necessity.NOM read-AINF book. ϕ ACC
「少年は本を読まなければならない。」

b. 否定文

Poja-n ei [ole pakko] [luke-a kirja-a]. (cf. (9b))
boy-GEN NEG.3SG be necessity.NOM read-AINF book-PAR
「少年は本を読まなくていい。」

このパターンは、構文化が進んでいることが明らかである。目的語が存在しない(6)のような通常の所有文と違って、通常の必須文でも包括目的語は ϕ 対格になるので、先程の所有文のパターン((9))より分かりやすい。〈on+主名詞〉が用いられている必須文的表現における包括目的語の格選択は、上述の普通の必須文の場合((8))と変わらない。すなわち、肯定文では ϕ 対格であり、否定文では分格になる((10)の *kirja* / *kirja-a* 「本」)。そして、所有文では所格だった文頭の名詞が、通常の必須文と同じ属格になっている((10)の *poja-n* 「少年」)。〈on+主名詞〉で合成述語として結合しているため、否定文であっても主名詞は分格にならず ϕ 対格のままである((10)の *pakko* 「必要」)⁷。否定文では主名詞が分格になる先程の所有文のタイプより、〈on+主名詞〉の結合が進んでいることが分かる。また、所有文のタイプは主名詞に修飾語を付けられるのに対して、この必須文的なタイプの主名詞には付けることができない(*ISK* 2004: 1504)。このことも、結合度の強さを示している。この表現は、A不定詞基本形による名詞修飾を含む所有文から発達したものだが、ここまで来ると、合成述語化がかなり進んでおり、もはやA不定詞基本形による名詞修飾とは見なせないことは疑いもない⁸。

これまで、〈on+主名詞+A不定詞基本形〉を含む構造について、所有文のタイプと必須文

⁷ 無論、肯定文でもともと分格の *syytä* 「理由」と *aihetta* 「理由」は、否定文でも分格である。

⁸ ただし本稿では説明の便宜上、on の後の名詞を、名詞修飾の場合と同様に主名詞と呼んでいる。

的なタイプに分けて見てきた。ここで、所有文の中にも、結合がさらに進んだタイプがあることを指摘しておく。一部の A 不定詞基本形を含む所有文では、否定文であっても、主名詞が分格にならず ϕ 対格のままである。この事実は、ISK(2004: 853)の、A 不定詞基本形の項目ではなく所有文の項目で、ごく簡単に触れられている。ただし、否定文でも所有物が分格にならず主格のままの例外的な決まった表現の一つとして、(7)のような例と共に、以下の(11)の例と〈on + tarkoitus「意図」〉の計 2 例が挙げているに過ぎず、特に説明はない。

(11) Minu-lla ei 【ole lupa】 【puhu-a】. 「私は話すことが許されていない。」

I-ADE NEG.3SG be permission.NOM speak-AINF

(cf. (9b)) (ISK 2004: 853)

この事実については、必須文的な表現と同様に、〈on+主名詞〉が合成述語的表現として確立したから主名詞は格変化しない、と考えることができる。この主名詞の格選択において、(11)のタイプは、(9)のような所有文のタイプより一段〈on+主名詞〉の結合が進んでおり、必須文的なタイプとの中間に位置づけられよう。

3. まとめと今後の課題

まとめとして、名詞修飾用法に端を発する〈on+主名詞+A 不定詞基本形〉を含むいくつかのパターンの段階性について、A 不定詞基本形の包括目的語・主名詞・文頭名詞の格選択の観点から、次ページの表 2 に整理する。比較のために、①には所有文・必須文ではない普通の名詞修飾を置いた。否定文での A 不定詞基本形の包括目的語の格の観点からは、①と②の間に線を引ける(表 2 の二重線部分、以下同様)。否定文での主名詞の格の観点からは、②と③の間に線が引ける。なお、1 章 3 節(4)のような結合した〈主文の動詞+主名詞〉の SVO 文も、主名詞の格と A 不定詞基本形の格から、②に含められる。肯定文の場合、結合した SVO 文の A 不定詞基本形の包括目的語は n 対格なのに対し、所有文・必須文の場合は ϕ 対格である。だがこの格の違いは、主文に主格主語が存在するか否かの違いによるものであり、結合度とは関係ない。また、〈N+on+主名詞〉の形式における文頭名詞の格の観点からは、所有文の②③と、必須文の④とが区別できる。右に行くほど、〈on+主名詞〉の結合度が強くなる。もともとは A 不定詞句が主名詞を修飾していたものの、〈on+主名詞〉が結合し、その構造の変化が、A 不定詞句の包括目的語の格選択に現れている。さらに結合が進むと、所有文の所有物である主名詞が、否定文でも格変化しなくなる。必須文的なタイプになると、結合がかなり進んでおり、もはやモダリティ表現としての構文になっている。

表2 (動詞+【主名詞+A不定詞基本形】) → (【動詞+主名詞】+A不定詞基本形)

番号	①	②	③	④
種類	普通の 名詞修飾	所有文	結合のより進 んだ所有文	必須文 的表現
例文番号	(1a)(3)	(9)	(11)	(10)
否定文でのA不定詞基本形の 包括目的語の格	φ対格	分格	分格	分格
否定文での主名詞の格	分格 ⁹	分格	主格	主格
〈N+on+主名詞〉のNの格		所格	所格	属格
〈主文の動詞+主名詞〉の結合度	弱い			強い 〈合成述語〉

最後に、本稿で不十分だった点について述べる。③のタイプについては、先行研究も含めて記述が非常に乏しく、どのような主名詞がこのタイプに入るのかを明らかにしなければならない。また、もしかしたら、1.3節のSVO文のA不定詞基本形の目的語のように、否定文での主名詞の格選択には揺れがあるかもしれない。複数の母語話者への確認が必要である。

A不定詞基本形による修飾に関する格の問題としては、他に、形容詞修飾における文頭名詞の格の問題が挙げられる。これに関しては、フィンランド語母語話者である Pekkarinen(2005: 140)が、「否定が現れているのは収集していないが、もし収集した例文を否定形に変えると、名詞句が分格になるのが自然に感じられる」とだけ述べて(12b)の例文を挙げている以外、管見の限り他に先行研究に記述が見当たらない。しかし、以下の否定文(12b)で文頭名詞 orava 「リス」が分格になるのは、文の構造を考えると奇妙である。

(12) a. Orava on helppo nylke-ä.
squirrel.NOM/. φ ACC be.3SG easy.NOM skin-AINF
「リスは皮を剥ぐのが簡単だ。」

b. Orava-a ei ole helppo nylke-ä.
squirrel-PAR NEG.3SG be easy.NOM skin-AINF
「リスは皮を剥ぐのが簡単ではない。」

(Pekkarinen 2005: 140)

(12)には、二通りの構造がありうる¹⁰。一つ目は、orava「リス」が文全体の主語の〈主語+コピー動詞 olla+形容詞+A不定詞基本形〉という構造で、A不定詞基本形が形容詞修飾の用法である。この場合、文頭名詞 orava「リス」は主語なので、否定文になっても主格のままのはずである。二つ目は、A不定詞句 nylkeä orava「リスの皮をはぐ」が文の主語であり、A不

⁹ 分格になるのは、主名詞が主文の目的語の場合である。主名詞が主文の主語や場所格補部の場合、当然否定文でも格変化しない。

¹⁰ (12)の文ではどちらの構造の可能性もあるが、文頭名詞を複数形にすると解釈は一通りに決まる。形容詞修飾の場合、動詞 olla は主語に一致し複数形 ovat になる。それに対し、A不定詞句が主語の用法の場合は、動詞は単数形の on のままである。

不定詞基本形の目的語である *orava* 「リス」が文頭に移動した場合である¹¹。ただしこの場合も、主語内の一要素である *orava* 「リス」の格に否定の影響が及ぶのは奇妙である。この問題も今後の課題としたい。

参考文献

- Harjunen, Tero. 2013. *A-infinitiivin lyhyen muodon akkusatiiviobjektin variaatio perussubjektillisissa lauserakenteissa: Kyselytesti- ja korpustutkimus*. Tampere University. Pro gradu.
- ISK: Hakulinen, Auli. [et al] eds. 2004. *Iso suomen kielioppi*. Suomalaisen kirjallisuuden Seura.
- Pekkarinen, Heli. 2005 "Sika on paha nyljettävä – mutta helppo ruokkia. Adjektiivin kanssa esiintyvien infiniittisten muotojen käytön tarkastelua." *Elävä kielioppi. Suomen infiniittisten rakenteiden dynamiikkaa*: 127-145. Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Penttilä, Aarni. 1963. *Suomen kielioppi*. W. Söderström.
- Toivonen, Ida. 1995. *A Study of Finnish Infinitives*. Brandeis University.
- Vilkuna, Maria. 2003. *Suomen lauseopin perusteet*. Edita.
- 松村一登 1992「フィンランド語」(亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典第3巻 世界言語編』: 673-688) 三省堂, 東京

略号一覧

ACC 対格, ADE 所格, AINF A不定詞基本形, ALL 向格, GEN 属格, NEG 否定, NOM 主格, PAR 分格, PAST 過去, POSS 所有接尾辞, SG 単数

¹¹ 〈On+形容詞+[A不定詞基本形+目的語]〉 → 〈目的語+on+形容詞+A不定詞基本形〉
フィンランド語の基本語順は SVO だが、A不定詞句は主語としての用法であっても文末に置かれ、文頭には現れない。

